孟郊の文学観について

薄井信治

序

詩人を文学史の上に置こうとするとき、詩人がどのような詩を理想とし目指したかを押さえておくことは基礎作業の一つである[1]。孟郊(七五一―八一四)という詩人を韓愈グループの中に位置させるときも、中唐詩壇で果した役割という点で考察するときにも、彼の文学観を問題にせざるを得ない。

唐の詩人には自らの詩論を専著にまとめた者が少なく、孟郊もその例にもれない。そのため詩文から絞り出すようにして文学観を把捉するという方法をとることになる。本稿では羅聯添が『隋唐五代文學批評資料彙編』でとりあげた四首の詩と一篇の序をもとにして、その作業を行ないたい。

一　「贈蘇州韋郎中使君」(巻六)

謝客吟一聲　霜落羣聽清
文含元氣柔　皷動萬物輕

謝客　一声を吟ずれば　霜落ち　羣聴清し
文は元気を含みて柔らかく　皷動して万物を軽し

嘉木依性植　曲枝亦不生
塵埃徐庾詞　金玉曹劉名
章句作雅正　江山益鮮明
蘋萍一浪草　菰蒲片池榮
會是康樂詠　如今搴其英
顧惟菲薄質　亦願將此并

嘉木　性に依りて植うれば　曲枝も亦た生ぜず
塵埃たり　徐庾の詞　金玉たり　曹劉の名
章句　雅正を作さば　江山　益すます鮮明なり
蘋萍　一浪の草　菰蒲　片池の栄
曽て是れ康楽の詠みしところ　如今　其の英を搴る
顧みて菲薄の質を惟ひ　亦た此を将て并ばんことを願ふ

「謝客」「康楽」は晋末宋初の謝霊運のことである[2]。この詩では韋郎中使君、つまり韋応物を謝霊運になぞらえて称えている。どちらも山水詩人として高名であり、この見立は絶妙の批評ともなっている。特に前六句は謝霊運＝韋応物の詩に対する孟郊の評価を示す。「清」「柔」「軽」という語で二人の詩を端的にとらえている。「嘉木　性に依りて植うれば、曲枝も亦た生ぜず」には「草木　地

を択びて生え、禽鳥　性に順ひて飛ぶ」（巻二　隠士）に通ずる「性」に対する考え方がうかがえる。

「徐庾」は徐摛・庾肩吾あるいは徐陵・庾信のことで、「徐庾の詞」とは彼らの綺豔麗華な詩風をいう。孟郊はそれを「塵埃」であると排斥し、かわりに「金玉」である「曹劉」を称揚する。「曹劉」は曹植・劉楨のこと[3]で、いわゆる建安の詩風を表している。

劉楨以外の建安の七子について、孟郊は王粲と阮瑀の名を挙げている[4]。特に王粲への言及は5例を数える。他の孔融・陳琳・徐幹・応瑒への言及は見えないが、「時に吟ず　五君の詠、再び挙ぐ　七子の風」（巻六　上包祭酒）、「頼り得たり　竟陵守、時に聞く　建安の吟」（巻九　贈竟陵盧使君虔別）とあるように建安の風骨への傾斜があったことが分かる。

第九句の「雅正」は「大雅」や「風雅」と結びつく、思想を主とした正しい詩、すなわち『詩経』の伝統を表す語である。この詩の展開上「雅正」は「曹劉」を代表とする建安の風骨をうけているので、孟郊は詩経精神を引き継いだものとして建安文学をとらえているといえる。

末二句は以上に述べてきた謝霊運＝韋応物の詩風に倣おうとする意志を示している。直接韋応物に贈った詩なので少し割引いて考える必要があるかもしれないが、謝霊運、韋応物、建安文学が孟郊において重要な位置を占めることは疑いない。

二　「答盧仝」（巻七）

楚屈入水死　　楚屈　水に入りて死し
詩死踏雪僵　　詩に死し雪を踏んで僵（たお）る
直氣苟有存　　直気　苟くも存する有れば
死亦何所妨　　死も亦た何ぞ妨ぐ所ならん
日劈高査牙　　日劈（さ）き　高きこと査牙たり
清稜含冰漿　　清稜　冰漿を含む
前古後古冰　　前古後古の冰
與山氣勢强　　山よりも気勢強し
閃怪千石形　　閃怪　千石の形
異狀安可量　　異状　安んぞ量る可けんや
有時春鏡破　　時有り　春鏡破れ
百道聲飛揚　　百道　声　飛揚す
潛仙不足言　　潛仙　言ひ足らず
朗客無隱腸　　朗客　腸を隠す無し
爲君傾海宇　　君が為に海宇を傾く
日夕多文章　　日夕　文章多し
天下豈無緣　　天下　豈に縁無からんや
此山雪昂藏　　此の山　雪昂蔵たり
煩君前致詞　　君を煩はし　前みて詞を致す
哀我老更狂　　我が老いて更に狂なるを哀しむ
狂歌不及狂　　狂歌　狂なるに及ばず
歌聲緣鳳凰　　歌声　鳳凰に縁る
鳳兮何當來　　鳳や　何（いつ）か当に来たりて
消我孤直瘡　　我が孤直の瘡を消すべけんや
君文眞鳳聲　　君が文　真に鳳声なり
宣隘滿鏗鏘　　宣隘　鏗鏘満つ
洛友零落盡　　洛友　零落尽し
逮茲悲重陽　　茲に逮んで重陽を悲しむ
獨自有異骨　　独自（ひと）り　異骨有り
將騎白角翔　　将に白角に騎りて翔ばんとす
再三勸莫行　　再三　勧めて行ふ莫かれ
寒氣有刀槍　　寒気　刀槍有り
仰慙君子多　　仰ぎ慙ず　君子多し
慎勿作芬芳　　慎んで芬芳を作す勿かれ

「答盧仝」は楚の屈原の死から詠じられる。「楚屈　水に入りて死し、詩に死し雪を踏んで僵る」とは、屈原は讒言に合い入水して死に、自分は詩によって

死に雪の中に倒れる、ということをいう。別のテクストでは「詩死」は「詩孟」であり、孟郊が詩に悪戦苦闘する様子を描写している。

孟郊が屈原に言及するのは他に6例ある[5]。そのうちの半分が屈原の死と関わっている。

靈均入廻流　靈均　廻流に入り
靳尚爲良謀　靳尚　良謀を為す

（巻一　湘絃怨）

「靈均」は屈原の仮りの字。「靳尚」は屈原をおとしいれた人物。

試逐伯鸞去　試みに伯鸞の去くを逐ひ
還作靈均行　還た靈均の行を作す

（巻三　下第東南行）

「伯鸞」は後漢の梁鴻のこと。「靈均の行」は陳延傑の注[6]によれば汨羅に身を投ずる直前の行吟を指す。

舊稱楚靈均　旧と称す　楚の霊均
此處殞忠軀　此処に忠軀を殞す

（巻六　旅次湘沅有懐霊均）

「軀を殞す」は死ぬことである。

屈原が詩に詠まれるとき、その入水死がとりあげられることが多いのだが、孟郊の場合にも死のイメージがつきまとっている。それゆえ第二句は「詩孟」よりも「詩死」の方が孟郊としては自然である。

第三四句「直気　苟くも存する有れば、死も亦た何ぞ妨ぐ所ならん」は、詩に「直気」さえあれば肉体は死んでも何の妨げにもならないということである。孟郊の詩に対する強い思い入れ、決意が感じられるものである。第二十句の「老いて更に狂」、第二十一句の「狂歌　狂なるに及ばず」の「狂」や第二十四句の「孤直の瘡」も孟郊の詩に対する強すぎる思いからきたものととって差し支えないであろう。

第五句以降はそのような思いを秘めた孟郊に見える心象風景が描かれる。「峡哀十首」に共通する奇怪なイメージに満ちている。後半部では盧仝の詩を待ち焦れる鳳凰の声であると称えている。

三　「送任斉二秀才自洞庭遊宣城詩序」（巻七）

文章者、賢人之心氣也。心氣樂則文章正、心氣非則文章不正。當正而不正者、心氣之僞也。賢與僞見於文章。一直之詞、衰代多禍。賢無曲詞。文章之曲直、不由於心氣。心氣之悲樂、亦不由賢人。由於時故。今宣州多君子、閑暇而寛。文章之曲直・纖微、悉而備擧。……

文章は、賢人の心気なり。心気楽しければ則ち文章正し、心気非なれば則ち文章正しからず。正に当つて正しからざるは、心気の偽なり。賢と偽とは文章に見はる。一直の詞は、衰代に禍ひ多し。賢に曲詞無し。文章の曲直は、心気に由らず。心気の悲楽も、亦た賢人に由らず。時に由る故なり。今宣州君子多く、閑暇にして寛なり。文章の曲直・纖微、悉くして備挙す。……

「送任斉二秀才自洞庭遊宣城詩序」では、文章に「正不正」「曲直」があることを述べている。文章（詩文）というものは賢人の「心気」の反映であり、「心気」が楽しい状態であれば文章は正しいものとなり、「心気」がそうでなければ文章は正しからざるものとなる。「心気」には「偽」の状態もあり、その場合文章は正しくとも正しくないものとして現れる。

このように「心気」によって「正不正」が決まるわけだが、さて、「心気」とは一体どのようなものであろうか。孟郊自身には他に「一章喩檄明、百萬心氣定」（巻八　送韓愈従軍）の例があるだけであり、この例は直接文学観とは結びつかない。そこで「心気」を「心」と「気」とに分けて考えてみる。

まず、文学論として重要な「気」をとりあげる。文学批評史の上[7]で「気」について最初に言及するのは魏の曹丕である。曹丕は「文は気を以て主と為す。気の清濁は体有り。力め強ひて致す可からず。」（「典論論文」）と主張した。文に現れた気の清濁は、作者の個性に従って体格が定まるので努力して手に入れられるものではないとするのである。この場合の「気」は作者の「気質」であるといえる。韓愈にも「気」についての言及があり、曹丕のものとは相違している。「答李翊書」では「気は水なり。言は浮かぶ物なり。水大にして、物の浮かぶ者、大小畢く浮かぶ。気と言と猶ほ是くのごとし。気盛んなるときは、則ち言の短長と声の高下する者と皆宜し。」という。この場合の「気」は作者の「気力」ということであろう。気力が旺盛であれば文章もうまくいくというのである。これは「詞に於て必ず己れより出づ」（「南陽樊紹述墓誌銘」）という韓愈自身の文学観に符合するものである。

孟郊のいう「心気」は韓愈の「気」に近いものがある。しかし、「百万　心気定まる」（送韓愈従軍）や「心気の悲楽」の例を見ると、やはり「心気」は「心」にウェイトのある語である。「心」のありかたの反映といっても、ただ感情によってだけ文章は左右されると孟郊はいうのではない。「心」の状態によって文章の「正不正」が決まるとしたら、「心」は一定不変のものではないので「正不正」も移ろいやすい表層的なものである。

本質的根本的なものは「曲直」で表されている。「文章の曲直は心気に由らず」とあり、「賢に曲詞無し」とあることから、「曲直」は「正不正」と直接結びつかないことが分かる。すなわち、賢でない者の文章が「曲」であり、賢人の文章は、時に「正」であったり、「不正」であったりしても本質的に「直」なのである。そして、それも結局は「時に由る故なり」ということである。

「一直の詞は衰代に禍ひ多し」からは、孟郊が当代を「衰代」つまり道の行なわれない衰えた世ととらえていることと、「直」であるがために禍いが多いのだと考えていることが分かる。孟郊は自分と自分の詩を「直」だと認識しており、誇りを持っているが、「直」であるがゆえに傷つき禍いを招くのだという被害意識も強く持っている。6例ほど挙げてみよう。

人心忌孤直。　人心　孤直を忌む
木性隨改易　木性　改易に随ふ
（巻二　衰松）

正直被放者　正直　放ぜらるれば
鬼魅無所侵　鬼魅　侵す所無し
（巻六　連州吟三章其三）

「連州吟三章」は陳延傑によれば、貞元十九年に韓愈が連州陽山令に貶せられたとき、韓愈のために作ったものであり、「正直」は韓愈を指す。

鳳兮何當來　鳳や　何か当に来たりて
消我孤直瘡　我が孤直の瘡を消すべけんや
（巻七　答盧仝）

忠直血白刃　忠直　白刃を血ぬる
道路聲蒼黄　道路　声　蒼黄たり
（巻七　汴州離乱後憶韓愈李翺）

「忠直」は陳注によれば、孟郊と同じく韓愈グループの一員である陸長源を指す。

應由放忠直。　応に忠直を放ずるに由り
在此成漂淪　此に在つて漂淪と成る
（第九　江邑春霖奉贈陳侍御）

志士不得老　志士　老いるを得ず
多爲直氣傷　多く直気の傷を為す
（巻十　哭李観）

このような強い被害意識は、当然「曲」であるものへの攻撃、排斥となるものであり、そのため「曲直」は孟郊の詩の発想を探る際のキーワードになっている。

四　「送淡公十二首　其十二」（巻八）

詩人苦爲詩　詩人　苦しんで詩を為るは
不如脱空飛　空に脱して飛ぶに如かず
一生空嚥氣　一生空しく嚥気のみ
非諫復非譏　諫に非ず復た譏に非ず
脱枯掛寒枝　脱枯　寒枝に掛かり
棄如一唾微　棄てらるること一唾の微かなるが如し
一歩一歩乞　一歩一歩乞ふ
半片半片衣　半片半片の衣
倚詩爲活計　詩に倚りて活計を為すは
從古多無肥　古へ従り多く肥ゆること無し
詩飢老不怨　詩にて飢うるも老いて怨まず
勞師涙霏霏　師が涙の霏霏たるを労す

「送淡公十二首其十二」では、「詩人　苦しんで詩を為るは、空に脱して飛ぶに如かず」といい、「苦しんで詩を為る」ことを否定しているかに見える。しかし、この部分は自嘲として解するべきである。孟郊は苦しんで詩を作り、詩によって苦しんだ詩人なのであるから。

一首の主題は後半部に現れている。「詩に倚りて活計を為すは、古へ従り多く肥ゆること無し」、詩人は肥えることがない、詩人の生涯に飢餓は当然だというのである。そして、「詩にて飢うるも老いて怨まず」と、そのことを一種誇りのように考えている。

詩と飢え、詩人と飢えについて、孟郊には飢え死にした詩人盧殷・劉言史を悼むものを中心に7例ほどある[8]。そのうち「送淡公十二首」の連作の「其十一」でも、盧殷・劉言史に触れている。

意恐被詩餓　意は恐る　詩餓を被らんと
欲住將底依　住まらん欲するも　将た底(なに)にか依らん
盧殷劉言史　盧殷　劉言史の
餓死君已噫　餓死せるを　君　已に噫けり

（巻十　哭劉言史）

「其十二」はこれと密接な関係がある。

詩人と飢えの関係も盧殷・劉言史に関して言及されている。

詩人業孤峭　詩人　業　孤峭にして
餓死良已多　餓死すること良に已に多し
詩人多清峭　詩人　多く　清峭なり
餓死抱空山　餓死して空山を抱く

（巻十　弔盧殷十首其一）

「孤峭」「清峭」のどちらにもある「峭」は厳しく険しいことであり、盧殷・劉言史の詩業がきわだっていることをいう。この二例では詩人と飢えとの関係は、すぐれた詩人であるにもかかわらず餓死した、というのではなく、すぐれた詩人であるからこそ飢え、餓死を免れなかったととらえている。

「詩飢」が詩人にとって切っても切れないものであり、より良い詩を作る者には更に餓死を免れ得ないというのであれば、「詩飢」を免れるどころか、詩を生活の手段として肥えている者に対して孟郊が批判的になるのも当然である。その批判のやり方は盧殷・劉言史に対する場合と全く逆になる。悪い詩であるからこそ肥えられるのだ、というのである。

悪詩皆得官　　悪しき詩は皆官を得
好詩空抱山　　好き詩は空しく山を抱く

（巻四　懊悩）

時代に受け入れられない者の僻みから来るものであるが、これが孟郊の詩の発想における基盤の一つであることは間違いない。

五　「読張碧集」（巻九）

天寶太白歿　　天宝に太白歿し
六義已消歇　　六義已に消歇す
大哉國風本　　大なる哉　国風の本
喪而王澤竭　　喪はれて王沢竭く
先生今復生　　先生　今復た生まる
斯文信難缺　　斯文　信に欠け難し
下筆證興亡　　筆を下して興亡を証し
陳詞備風骨　　詞を陳ねて風骨を備ふ
高秋數奏琴　　高秋　数奏の琴
澄潭一輪月　　澄潭　一輪の月
誰作採詩官　　誰か採詩の官と作らん
忍之不揮發　　之に忍びて揮発せざるや

張碧は貞元年間（七八五～八〇四）の人。

詩では、まず天宝（実際には宝応）年間に太白（李白）が没したことで、六義（『詩経』）の伝統が一旦絶えてしまったことを述べる。李白に言及したものは他に4例あり[9]、それぞれ李白の詩才を高く評価したものとなっている。しかし、『詩経』との関連が述べられているのはここだけである。

李白自身は文学論として復古を唱え、「古風五十九首」の其一では、『詩経』こそ詩の正統であるとし、その伝統を受け継ぐ志を述べる。

大雅久不作　　大雅久しく作らず
吾衰竟誰陳　　吾衰へなば竟に誰か陳べん
……　　……
正聲何微茫　　正声　何ぞ微茫たる
哀怨起騷人　　哀怨　騷人を起こす
……　　……
我志在删述　　我が志は删述に在り
垂輝映千春　　輝を垂れて千春を映さん

「大雅」は『詩経』の分類の一つ。「正声」は正しい音、ここでは『詩経』のような思想を主とした正しい詩を指す。「大雅久しく作らず」「正声　何ぞ微茫たる」はともに詩の正統である『詩経』の伝統が廃れてしまったことをいう。「删述」は孔子が『詩経』を編集したことを意味する。「吾衰へなば竟に誰か陳べん」「我が志は删述に在り」はともに『詩経』の伝統を引き継ごうという李白の意志を示している。

孟郊は張碧が李白の志を継いで『詩経』の伝統を再生させたと評価している。第七句以降はその形容である。詩の中の「六義」「国風」「採詩の官」はすべて『詩経』と深く結びつくものである。張碧の詩について述べたものだが、孟郊自身の『詩経』への思いがうかがえる。

この外の孟郊の『詩経』について言及したものでは、『詩経』への憧憬が感じられるものがある。

能詩不如歌　　詩を能くするは歌に如かず
悵望三百篇　　悵望す　三百篇

（巻三　教坊歌児）

何當補風教　　何か当に風教を補ひ
爲薦三百篇　　為に三百篇を薦むべけんや

大雅難具陳　大雅　具さに陳べ難し
正聲易漂淪　正声　漂淪し易し

（巻八　送魏端公入朝）

（巻七　答姚怠見寄）

これらは自ずと当代の文学への批判を含んでいる。

結

孟郊は復古主義の潮流でとらえられるべき詩人である。『孟東野詩集』にも「古」の字が頻出する。しかし、その多くは「今」を批判するために打ち出された「古」であって、具体的内容が伝わって来ない。それどころか、「文化的、社会的な広がりを持たず、いわば無内容な痩せて枯れた倫理的護符といったものでしかない」（山之内正彦）という「古」もあるのである。

本稿で扱ったもののうち復古に関わるのは、㈠『詩経』の伝統の継承（読張碧集）、㈡屈原への言及（答盧仝）、㈢建安文学の称揚（贈蘇州韋郎中使君）、㈣謝霊運の評価（同上）であるが、それらが「古」としてそれぞれどのような関係があるのか、具体的にどれに重点があるのかといったことを残念ながら明らかにし得なかった。これを行うには実作における発想・表現の比較が必要である。㈠と㈢などは比興表現とその発想を孟郊のそれと比較することによって何かしら明らかに出来るものがあるのではないかと思う。

また、文学観としては同時代の韓愈と皎然のそれと精密に比較検討する必要があるであろう。

（注）

底本には、華忱之校訂『孟東野詩集』（人民文学出版社）を使用し、野口一雄編『孟郊詩索引』（東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター）を参考にした。

① 本稿は基礎的作業であるため、自ずと先行論文の補遺という性格を持つことになる。特に参考にした論文を次に挙げ、感謝の意を表したい。

山之内正彦「孟郊詩論（上）―連作詩を中心に―」東洋文化研究所紀要68

赤井益久「孟郊論―仕官前の恬淡と執着―」中国文学の世界6

② 謝霊運を詠んだ他の例としては、「戎府多秀異、謝公期相携」（巻七　寄院中諸公）、「追悲謝霊運、不得殊常封」（巻九　品松）、「康樂寵詞客、清宵意無窮」（巻五　夜集汝州郡斎聴陸僧辯弾琴）、「去塵咫尺歩、山笑康樂巖」（巻九　噴玉布）がある。

③ 他の例として、「曹劉不免死、誰敢負年華」（巻四　招文士飲）

④ 「漢家正離亂、王粲別荊蠻」（巻二　感懐八首其七）、「禰生投刺遊、王粲吟詩謁」（巻七　答韓愈李観別因献張徐州）、「王粲有所依、元瑜初應命」（巻八　送韓愈従軍）、「仲宣荊州客、今余竟陵賓」（巻六　自商行謁復州盧使君虔）、「仲宣領騎射、結束皆少年」（巻八　送盧汀侍御帰天徳幕）

⑤ 引用した以外の例は、「一掬靈均涙、千年湘水文」（巻一　楚竹吟酬盧虔端公見和湘絃怨）、「涙流瀟湘絃、調苦屈宋彈」（巻三　商州客舎）、「勞收賈生涙、強起屈平身」（巻五　羅氏花下奉招陳侍御）である。

⑥ 陳延傑撰『孟東野詩注』（新文豊出版公司）。ただし新文豊出版公司本は著作者を孟浩然とし陳延傑の名を挙げていない。序文により改めた。

⑦ 青木正兒「支那文學思想史」（『青木正兒全集第一巻』春秋社）、羅根澤『中

國文學批評史』（上海古籍出版社）、朱東潤『中國文學批評史大綱』（上海古籍出版社）等を参考にした。

⑧ 引用した以外の例は、「餓死始有名、餓名高氛氳」（巻十　弔盧殷十首其六）、「搏鷙有餘飽、魯山長飢空」（巻十　弔元魯山十首其一）、「所以元魯山、饑衰難與偕」（巻十　弔元魯山十首其四）である。

⑨ 「退之如放逐、李白自矜夸」（巻四　招文士飲）、「宋玉逞大句、李白飛狂才」（巻六　贈鄭夫子魴）、「可惜李杜死、不見此狂癡」（巻六　戲贈无本二首其一）、「高名稱謫仙、昇降曾莫停」（巻十　弔盧殷十首其十）

（宇部工業高等専門学校国語教室）

（昭和六十二年九月二十日受理）